

佐土原キリスト教会 2022年12月4日礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書13章1～13節

説教題：気をつけていなさい

私は、若い頃から痛風を病んでいます。痛風の困るところは、激しい痛みが突然やって来ることです。以前、ある教会の礼拝に招かれて、証しをする日曜日の朝に、痛みがやって来て、慌てたことがあります。その時は、家内に鎮痛剤とシップ薬とを買って来てもらって、何とかその場を切り抜けたようなことでした。それ以来、尿酸値を下げる薬を飲み続けています。おかげで、近年は、痛風の痛みに襲われることはなくなりました。

突然やって来るものについては、2つの対処法があります。1つは、痛風のようなものは、薬を飲み続けることによって、それがやって来ないようにする方法です。もう1つは、「やって来ないように出来ない」ものについては、いつやって来ても良いようにしっかりと心備えをしておくことです。

1：イントロダクション

イエス様は、ここで、その後者のことをされるのです。どうしてもやって来るものがある。そうであれば、弟子達の心をそれに向けて備えさせなければならない。「1節」に「イエスが、宮から出て行かれるとき、弟子のひとりがイエスに言った。『先生。これはまあ、何とみごとな石でしょう。何とすばらしい建物でしょう』」(1)とあります。高校の友人が初めて東京に行って、高層ビルの真下に立って上を眺めていたそうです。そうしたら、通りかかった人から「首が痛いでしょう」と言われたと言っていました。ガリラヤの田舎から出て来た彼らにとって、神殿の荘厳さは目を見張らせるものがあつたのでしょうか。そこに用いられている石は、一辺が5mもあるようなものでした。世界の不思議に数えられた建築物です。

しかし、神殿は、「祈りの家」ではなく「強盗の巣」になっていました。だから、神殿の大きさに目を奪われている弟子達の目を、イエスは正されます。「この大きな建物を見ているのですか。石がくずされずに、積み残されたまま残ることは決してありません」(2)。言い換えると「この大きな建物に目を奪われているのか。1つの石も、ここで崩されずに他の石の上に残ることはない。神殿が、やがて必ず崩れる」、そう言われるのです。これを聞いて弟子達は心配になりました。「そんなことがあるとしたら、それは『世の終わり』に違いない」と思いました。「世の終わり」、それは当時のユダヤ人にとってポピュラーなテーマでした。

場所は、オリーブ山に移ります。オリーブ山からは神殿を見下ろすことが出来ました。弟子達の心には、イエス様の予告が響いています。「神殿が壊れるということは、『世の終わり』の出来事であるに違いない、本当にそうなったら、私達はどうなるのか、どうすれば良いのか」。だから『世の終わり』が来た時に、それがすぐに分かるように、『どんな兆候があつたら「世の終わり」だ』と理解したら良いのか、イエス様、あなたならそれをご存知のはずです、教えて下さい」と尋ねたのです。

その質問に対してイエス様の答は、5節から37節まで、33節に渡って続いて行きます。その中でイエス様は、「間もなく始まる迫害の時代」のことから「ずっと先に待っている『世の終わり』の時」のことに至るまで、これから起こることを語られます。その中で今朝は「1～13節—(特に5～13節)」を学びます。「5～13節」は、内容的には2つのことが語られます。「5～8節」では『世の終わり』の前兆について語られ、「9～13節」には「混乱に向かって行く世の中でキリスト者はどう生きれば良いのか、キリスト者の在り方」が語られます。時間的には「9～13節」の方が、より近い将来に起こることです…というか「マルコ福音書」を最初に呼んだ人々にとって、それはすでに身近に起こっていること、経験したことだったかも知れません。その延長線上には「世の終わり」が待っているのです。

「終末」とか「迫害」とかいうと、私達には縁遠いテーマのような気がしますが、キリスト教の歴史観では、イエス様の十字架と復活の後、世界の歴史は「終末/世の終わりの時代」に入ってい

ると理解します。私達も「終末」を生きているのです。そして、歴史は間違いなく「世の終わり」に向かって進んでいます。最近、インターネットで「エゼキエル戦争」という言葉を聞きます。「『世の終わり』に、ロシアがイランやトルコと同盟をして、イスラエルに攻め入る』という預言が聖書にある」と主張されます。今の世界情勢を見ると、そうなりつつあるような気がしているのですが、いずれにしても、この個所は私達にも語りかけられています。ここに何が書いてあるのか、それは私達にどんなメッセージを語るのか、学びます。

2：内容とメッセージ

イエスはここで何を教えておられるのか。要約すると次のようなことです。「人を惑わす者が現れる。そして戦争につぐ戦争、混乱が起きる。『しかし、終わりが来たのではありません』(7)。『この世の終わりか』と思うような出来事に心を奪われるな、そのような人々の声に惑わされるな、恐れるな』」。要するに「世界に、世の中に何があっても、慌てないで、しっかり立って、信仰生活を守って行くように」と励ましておられるのです。さらに具体的に、次の2つのことを語られます。

1) 終末を生きるキリスト者の生き方としての「証」

1番目は、「キリスト者の生き方としての証」ということです。「7～8節」にあるように、惑わす者が現れ、地震があり、飢饉があり、戦争があり、様々な混乱が起こるのでしょうか。しかしイエス様は「終わりが来たのではありません」(7)と言われます。ただ確かに「産みの苦しみの初め」(8)であるに違いない。何を生み出す苦しみでしょうか。「神の計画における世の完成—(新しい世界の再創造)」です。ここに、私達の、世の中に対する見方があるのです。世界は、今でも混乱していますが、ますます混乱して行くのでしょうか。今も「私こそそれだ—『自分こそキリストだ』(リビング・バイブル 6)」(6)と名乗る者が、身近に現れている時代です。日本の社会にとって現実的な問題です。苦しみです。このように世の中はますます混乱して行くのでしょうか。

しかし、私達は教えられます。世の終わりは、混乱が極みに達して起こるというものではないのです。最終的には、イエス様が再臨されることによっておこるのです。ということは、私達にとって、「世の終わり」は、決して悲惨な出来事ではないのです。CS ルイスは言いました。「その時、全宇宙は夢のように溶け去り、われわれがかつて思い浮かべたこともないような何か、すさまじい勢いで押し寄せてくるのである。それは、ある人達にとってはあまりにも美しく、他の人達にとってはあまりにも恐ろしいものであって…それは、あまりにも圧倒的なものなので、すべての人間に、抵抗しがたい愛か、さもなければ抵抗しがたい恐怖を叩きつけずにはおかないだろう」(CS ルイス)。私達にとって、あまりにも美しいものなのです。むしろ私達は、世の終わりに対して希望を持つことが出来るのです。

だからこそ、イエス様は「あなたがたは、気をつけていなさい」(9)と言われるのです。「自分自身に目を注ぎなさい。他のものに目を奪われてはならない」、そういうことでしょうか。自分の何に気をつけるのか。「10節」に「こうして、福音がまずあらゆる民族に宣べ伝えられなければなりません」(10)とあります。「気をつけるべき自分」とは、「喜びの訪れ(福音)」を担わされている自分です。「大混乱が来た時に、大混乱の中で信仰のために弁明をしなければならなくなる時があるだろう—(世界中の多くのキリスト者が直面していることです)。しかしそこで、自分自身に目を留め続けなさい。自分を生かしている喜び(福音)に目を留め続け、立ち続けることが出来るように、自分に気をつけていなさい」とイエスは言われるのです。言葉を換えると「あなた方は、福音を、喜びの知らせを、語り伝えるのです、それがあなた方の立つべきところですよ」と言われたのです。

アメリカで同時多発テロが起こった時、「彼らは彼らの信じる神のために命を賭けた」というような報道がありました。私は一瞬「それではキリスト教と一緒にではないか」と思って混乱しました。その時、ある本に「命をかけて人を殺すか、命をかけて人を愛するか、その違いだ」と書いてあるのを読み、スッキリ整理してもらった気がしました。私達は、隣人を愛するからこそ、福音を、真

の喜びを、伝えるのです。私達の生きるべき一筋の道は、救われている今を喜び、これを宣べ伝えることです。だから迫害の中で「マルコ福音書」を読んだ人達は、伝道に勤しんだのです。自分の信仰だけを大切に生きてきたことをしなかったのです。いつでも伝道したのです。「私達を生かす喜び、あなた方を生かす喜びがここにある」と告げたのです。「10節」の「福音がまずあらゆる民族に宣べ伝えられなければなりません」(10)の「…ねばなりません」は、人を救おうとされる神の御心を示す言葉です。だから彼らは、その御心に生きたのです。2000年後の日本に生きる私達も、同じメッセージを受け取らなければならないと思うのです。

先日、アナバプテスト・セミナーが開かれましたが、8年前に東京でセミナーが行われた時、私は忘れられない言葉を聞きました。アナバプテストは、メノナイトは、多くの殉教者を出した群れです。先日もディレク・ヴィレムスの話をしました。彼は、敵を愛するために殉教して行くのです。しかし私は、殉教と今を生きる自分が結びつかなかったのです。(皆さんはどうでしょう)。東京で聞いた言葉とは「現代の殉教とは、地方で福音を宣べ伝えることである」という言葉でした。伝道は難しいです。皆さんも、それを経験して来られたことでしょう。先日も救霊祈祷会で1人の姉妹が「最近知り合った女性の救いのために、教会に誘ったりしているが、難しいのでとにかく祈っている」と証しをしておられましたが…とにかく難しい。しかし、難しい、困難があるからこそ、「現代の殉教とは、地方で福音を宣べ伝えることである」と表現されるものなのだろうと思うのです。

日本は、世界でも稀なクリスチャンの少ない国だと言われます。キリスト教に対して最も敵対的だと言われるイスラム教を国教とする国にも、3%くらいのクリスチャンがいると言われるのです。日本は、1%と言われて久しい。なぜこんなにクリスチャンが少ないのか。分りません。教会の働きが足りないのかも知れませんが、反省しきりです。しかし一面から言えば、日本のクリスチャン人口は、増えはしませんが、極端に減りもしない。私は、神様が日本のクリスチャンに期待して、恵みの御手で日本のキリスト教を支え続けておられるのだと思うのです。であればこそ私達も、この時代に、この国で「福音を語る、証に生きる」、その一点に固く立たなければならぬと思うのです。それが御心を生きることです。私達も、一緒に伝道に励みましょう。そこが私達の立つところですよ。

「福音を語る、証に生きる」というと、とても難しいことを負わされたような気がします。しかし、ここでイエス様は「彼らに捕えられ、引き渡されたとき、何と言おうかなどと案じるには及びません。ただ、そのとき自分に示されることを、話さない。話すのはあなたがたではなく、聖霊です」(11)と言われます。私達は捕らえられるような状況にはありませんが、申しあげたように、福音を語るということには、恐れが伴います。しかしイエス様は「案じるには及びません」と言われます。なぜなら「聖霊がすでに私達の中にあって、私達の言葉さえ作って下さる」と言われるのです。ある牧師が次のように言っておられます。「『言うべきことは、その時に示される』のです。『話すのはあなたがたではなく、聖霊です』。人間が頑張っても、証はなされるものではないのです。証ししてやろうと決心して出来るものではありません…語るべきことは『授けられる』のです。いや、そもそも語るのは私達ではなく、『父の霊』なのです…証しはさせて頂くものだ、そう思いたい」(小島誠志)。私達がすることは、「機会が与えられたらいつでも救いの証し、神の恵みの経験、与えられた言葉を語ろう」、そう心備えをすることではないでしょうか。あとは、神がして下さるのです。

さらにこの先生は、「証に生きる」ことについて次のような励ましも語っています。「『証』というものは特別な行為であってはならないのです…現実のうっとうしいあれこれの出来事に足をつっこみながら、生きている信仰が証しです。苦しいと言って呻き、悲しいと泣き、自分の弱さに何回もつまづきつつ、神によりすがって生きて行く、それが私達の信仰生活です。それは…しばしばはなはだカッコ悪いことです。それで良いのです。どんなにカッコ悪く、つまずこうが叫ぼうが、その人間の支えられている土台というものは現れてくるのだと思います」。プロゴルファーの中島常幸さんの弟の篤志さん、彼はお父さんが亡くなって、ゴルフ場経営の重荷をいっぺんに負われ、心を病んで入院するのです。でもその時に兄の常幸さんからもらった聖書と三浦綾子さん

の本で立ち直って行くのですが、彼に決定的な影響を与えたのは、テレビで見た兄常幸さんのプレーしている姿でした。中島常幸さんも、信仰によってカムバックを果たした人ですが、篤志さんは兄を見て、理屈抜きで「神が兄を生かしている、兄は神の力によって生かされている」と強烈に感じるのです。そして「ここにしか自分の生きる道はない」と確信させられて、信仰の道を歩み始めるのです。

私達が神にすがって生きること、そこに既に「証」がある、福音のメッセージがあるのです。終末に生きる私達も、主の御心を生きたい。身の丈にあったもので良い、「証」に、神の御心に、生きて行きたいと願います。

2) 終末を生きるキリスト者の生き方としての「忍耐」

この個所のもう 1 つのテーマは「忍耐」です。(短く話します)。「12～13 節」「また兄弟は兄弟を死に渡し、父は子を死に渡し、子は両親に逆らって立ち、彼らを死に至らせます。また、わたしの名のために、あなたがたはみなの方に憎まれます。しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます」(12～13)。「耐え忍ぶ」、それは「しっかり立つ」という意味の言葉でもあります。イエス様は「しっかり立ちなさい。最後までしっかり立ち続けなさい」と言われます。申し上げたように、「世の終わり」、それは、信仰者にとっては、「天国への凱旋」を意味します。しかも、「天国に凱旋するまでしっかり立つ」、その天国の幻はイエス様が与えて下さった目標です。だから、イエス様が支えて下さる、イエス様が立たせて下さるのです。

私は、水野源三さんについての文章を思います。瞬きしか出来なかった水野さんにとって、そのご生涯そのものが大混乱の中にあられたことでしょう。でもこう書いてありました。「大人も子供も、源三を支えているのは、神以外の何ものでもないことを知っていた。それは何か大きな出来事を通してということではなく、日常の落ち着いた迷いのない彼の生き方を見て、そう思わずにはいられないようにされていたのだ。源三は…信仰によって人は変えられ、神によって豊かにされることを、まのあたりに実証して見せた。それは源三の力ではない。神の力であることを、人々は信じた」。ここに聖書の語る「忍耐」が成り立つのです。神が支えて下さるのです。

確かにこの世的には、私達にも、今も、様々な困難があります。大なり小なり、皆さんが何がしかの戦いの中におられると思います。その延長に「終末」がある。しかし、私達も主のもので。最終的には、私達は救われるのです。そして、その時まで、神が私達の信仰を支えて下さるのです。私達はそのことをしっかり見据えて、どんな困難があつたとしても、どれもこれも主の支配の中で起こっていることであり、永遠の勝利に結びついていることを信じて、忍耐を持って信仰をしっかり守って行くこと、願わくは証しに生きること、それが大切なのだと思います。そのように生きる私達にイエス様は言っておられます。「わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます」(マタイ 28:20)。感謝です。